The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	自己愛の適応・不適応と性役割の検討
Author(s)	松並, 知子; 中村, 晃
Citation	大阪大学教育学年報. 2001, 6, p. 255-266
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5470
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学教育学年報 第6号（2001年）
Annals of Educational Studies Vol.6

自己愛の適応・不適応と性役割の検討

中村　晃　　松並知子

【要旨】

本研究の目的は、自己愛の適応・不適応の側面、および多様な性役割の側面を考慮することにより、性役割と自己愛の関連を検討することであった。使われた尺度は、自己愛人格目録（NPI）、偽自律性尺度（PA）と仲間集団への依存尺度（PGD）、自尊感情尺度、および性役割を測るためのM-H-Fスケールであった。自尊感情とNPIの関係の検討から、NPIの下位尺度のうち「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」は自己愛の適応的な側面を表すのに対し、「注目・賞賛願望」は自己愛の不適応的側面を表していると考えられた。またPGDにおいても自尊感情尺度との関連から、自己愛の不適応的側面を表していることが示唆された。NPIの下位尺度と性役割の相関を求めたところ、「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」と、現実自己の男性性、humanity、女性性に有意な正の相関が認められたが、「注目・賞賛願望」に関しては、男性性、humanityとはともに有意な相関が認められなかった。また「社会的に望ましい性役割と現実自己における性役割の差異」「理想自己と現実自己の差異」ともに、男性性とhumanityにおいては、「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」との間に負の相関が認められたが、「注目・賞賛願望」とは相関が見られなかった。また、男性性、女性性双方が高いアンドロジニー群が、高い適応的な自己愛を示すことが示唆された。

1．問題と目的

自己愛とは、字義通りにいえば自分を愛することであるが、Akhtar & Thomson（1982）は、自己愛を本質的には“自己に対する心理的関心の集中”と定義した。現在までに自己愛を測定する様々な試みがなされている。投影法を用いたものでは、ロールシャッハ（Exner, 1969; Harder, 1979; Urist, 1977）や、TAT（Harder, 1979）などが自己愛を測定するために使われた。質問紙を用いた研究も多くなされたが、その中でも、Raskin & Hall（1979）が開発した自己愛人格目録（NPI）は、信頼性や妥当性について確認されており（Raskin & Hall, 1981；Emmons, 1984）、実証的研究において、最も頻繁に自己愛を測定するために使われるようになっている。NPIは自己愛人格障害の診断基準で特徴づけられる性格傾向をもとにつくられたが、健康な人も含めてパーソナリティの変数の一つとしての自己愛傾向を測定するものである。

Kohut（1971）は自己愛自体が、未熟な自己愛から成熟した自己愛に発達していくと考え、適応、あるいは不適応的な側面を連続的なものとして考えた。実証的研究においては、自己愛を測定する尺度と他の様々な尺度との相関から、自己愛の適応・不適応面の検討がなされている。例えば、NPIと適応との関係が深いといわれている自尊感情の関係を検討した研究では、一貫して正の相関が見られると報告されている（Emmons 1987、Kernis & Sun, 1994、Raskin & Terry, 1988）。自己愛の適応・不適応的な側面に注目した研究の例として、Emmons（1984）はNPIの因子分析により「指導性・権威」「優越感・高慢」「自己専念・自己賛美」「搾取・権利意識」の4つの因子を抽出し、そのうちの「搾取・権利意識」の因子以外は自尊感情とは正の、現実自己と理想自己の差とは負の相関を示したことから、「搾取・権利意識」は不適応的側面を反映し、それ以外の因子は適応的な側面を表していると報告している。「指導性・権威」「優越感・高慢」「自己専念・自己賛美」が適応的で、「搾取・権利意識」は不適応的側面を表すという結果は、その後の研究でもたびたび確認されている。たとえば「指導性・権威」「優越感・高慢」「自己専念・自己賛美」は高い自尊感情、適応的な対人間の感受性と関連する（Watson et al, 1992）一方、「搾取・権利意識」は他の3つの因子と異なり、低い共感性、対人関係上の苦痛、社会的責任感の低さ、社会的な望ましさの低さと関係することや（Watson & Morris, 1991）、気分の変動や激しさと関係すること（Emmons, 1987）が示されている。わが国では小塩（1997）が自己愛傾向と自尊感情の間に正の相関を見出しているが、自己愛の不適応的な側面に関して焦点を当てた研究は、あまり見られない。

そこで、本研究では自己愛を適応的側面だけでなく、不適応的な側面にも注目して検討することを目的

とする。Kohut（1971）は自己愛を未熟な自己愛から健康な自己愛に向かって、「誇大的・顕示的自己」から「野心」へと、また「理想化された親イメージ（理想化欲求）」から「理想」への二方向性をもって発達していくと考え、健康的な自己愛と病理的な自己愛を連続的なものとして考えた。「誇大的・顕示的自己」とは、幼児期に示す万能感や顕示性といった特徴を指し、周囲の大人の鏡映を受けて、健全な「野心」へと発達する。一方「理想化欲求」とは、幼児期に自分を大切に暖かく守ってくれる対象を、万能な対象として理想化し、一体となりたいという欲求で、それに対し周囲の大人が適切な理想化イメージを与えることができると、自分のなかに健全な「理想」として形作られていく、と考えられた。これに基づきRobbins（1989）は「誇大的・顕示的自己」を計測するものとしてSperiority scale、「理想化欲求」を計測するものとしてGoal Instability scaleを開発した。またLapan & Patton（1986）は、この自己愛の未成熟性を測定する尺度として、「誇大的・顕示的自己」を測る偽自律性尺度（Pseudoautonomy、PA）と、「理想化欲求」を測る仲間集団への依存尺度（Peer-Group Dependence、PGD）を作成した。すでにPAとPGDに関して、信頼性、妥当性は確認されている。例えば、PAとPGDの得点はともに、精神科患者群と一般群の間に有意な差が認められたと報告されており（Lapan & Patton 1986）、また対象関係目録（Object Relation Inventory）との検討から、PAに関しては、不健康な誇大さと関係し、PGDは未熟な理想化の指標となることが示されている（Little, et al., 1992）。他の自己愛尺度との関連では、「理想化欲求」より「誇大的・顕示的自己」がNPIとは関連しており、「理想化欲求」は対人関係の問題と関係することが明らかにされている（Little, Watson, Biderman & Ozbek 1992）。PAの高得点者は、恐れによって引き起こされる、防衛的で見せかけの自律性を持つという特徴を持つ一方、PGDの高得点者は、理想化された他人と一体感を持つという、防衛的な方法によって自尊感情が維持されるといった特徴を持つといわれている（Kerr et al., 1994）。このように、PA、PGDともに自己愛の未熟性という視点から、自己愛の不適応的側面の指標になると考えられる。

不適応的な自己愛は、望ましい性役割を体得できないことに関連があると報告されている (Watson, Biderman & Boyd, 1989, Little, et al., 1992)。また、Kohut理論における「誇大自己」は男性性と、「理想化欲求」は女性性と関連があるとされている (Sawrie, Watson & Biderman, 1991)。自己愛と男性性との関連を報告した先行研究は多く(例えば、Watson, Taylor, & Morris, 1987 ; Carroll, 1989; Watson, Biderman, & Sawrie, 1994)、小塩(1998)は自己愛傾向の特徴である「優越感・有能感」や「自己主張」が、男性にとって望ましいとされる「指導力のある」や「自己主張のできる」等の性質と類似していることが要因ではないかと考察している。

Bem (1974)は、男性性と女性性を兼ね備えた両性具有性群（アンドロジニー）が、女性性のみが高い女性性群や男性性のみが高い男性性群、男性性も女性性も低い未分化群と比較して、心理的に最も適応的であるとしている。Kohut理論を分析したWestin (1985)は、自己愛には、誇大自己的で尊大な「内向的（inernal）自己愛」、理想化欲求が高く盲従的な「外向的（external）自己愛」、そのどちらの傾向にも偏らない適応的な「統合的（synthetic）自己愛」、そして、内向的、外向的双方の傾向を併せ持つ「蒼古的（archaic）自己愛」の4タイプがあるとしている。この「内向的自己愛」は男性性群と、「外向的自己愛」は女性性群と、「統合的自己愛」はアンドロジニー群と、「蒼古的自己愛」は未分化群と関連があると報告されており (Watson et al, 1989)、最も高い自己愛傾向を示していたのは、男性で男性性役割を持つ群であった (Watson et al, 1987 ; Carroll, 1989)。

性役割の研究には男女差の検討が不可欠であるが、自己愛の男女差に関しては様々な議論がなされている。Philipson (1985)は、男性はアイデンティティ形成にあたり、女性以上に母親との明確な分離を経験しなくてはならないが、分離後も自我を維持していかなくてはならないために、誇大自己的な傾向が見られるのである、と述べている。また臨床研究においては、報告されている自己愛人格障害の患者のほとんどは男性であるとされている（Akhtar & Thomson , 1982 ; Haaken, 1983）。一方、Freud(1957)は、女性の方が男性よりも自己愛的であると述べている。女性の自己愛傾向について、Philipson (1985)は、女性は自分と母親を同一視する傾向があり、その結果、女性の自立心は妨げられ、依存的な自己愛が強まる、と記している。実証研究においては、細井 (1977)が、自己愛傾向は、男子では野心を含めた成就と結びつき、女子では外見を含めた顕示と結びつくことが多かったと、述べている。男女どちらがより強い自己愛傾向を示

すかについては、様々な報告がなされており、結論は定まっていないが、自己愛傾向は男女で異なった性質を示すことが考えられる。そのため、性役割と自己愛のどの側面が関係しているのか、特に、自己愛の適応・不適応とはどのように関連しているのかについて、男女差も考慮に入れ、検討する必要があると考えられる。

性役割には、「社会的に望ましいとされている性役割」「自分自身が理想とする性役割」「実際に自分が体現している性役割」など多様な側面があると考えられる。理想自己と現実自己に大きな差異があれば、自尊感情が低下することが報告されているが（遠藤、1992；水間、1998）、性役割についても、社会的に望ましい性役割と理想自己における性役割、現実自己における性役割との隔たりが大きければ、性役割葛藤が生じ、性役割同一性が確立できず、自己の安定感や、ひいては適応の問題にもつながると思われる（遠藤・橋本、1998）。特に、女性は男性に比較して、自らの性役割を受容することに困難を感じ、性役割葛藤が大きいという報告は多い（柏木、1972；伊藤・秋津、1983）。自己愛と性役割が関連しているのであれば、性役割葛藤が自己愛の成熟に影響を与え、不適応的な自己愛につながると考えられる。

本研究においては、NPIの各下位尺度と、不適応的な自己愛を測定する尺度とされているPAとPGDを用いることにより、自己愛の適応・不適応的な側面と性役割との関連を検討することを目的とする。また、多様な性役割の側面を検討することにより、性役割と自己愛の関連をより深く考察することを試みる。

2．方法

(A) 調査対象および調査時期

関西地区の専門学校生、大学生、および大学院生170名（男性41名/女性129名）を対象に、2000年4月に質問紙調査を実施した。平均年齢は19.75歳（SD 2.8歳）であった。

(B) 調査内容

(1) **自己愛の測定：**Raskin & Hall（1979）により作成された尺度を大石（1987）が邦訳した、自己愛人格目録（NPI、54項目5件法）を用いた。未熟な自己愛の測定には、Lapan & Patton（1986）によって作成された尺度を中西と葛西（1992）が邦訳した、偽自律性尺度（PA、8項目5件法）と仲間集団への依存尺度（PGD、8項目5件法）を用いた。

(2) **自尊感情の測定：**Rosenberg（1965）により作成され、山本ら（1982）が邦訳した、自尊感情尺度（4件法）を用いた。

(3) **性役割の測定：**伊藤（1978）によるM-H-Fスケールで用いられた、masculinity（男性性）（M得点）、femininity（女性性）（F得点）、humanity（男女に共通して望ましいとされる特徴）（H得点）の項目に対し「あなたが男性なら男性として、女性なら女性として一般的に望ましいと思われるには、どの程度重要であるか」（社会的望ましさ）、「あなた自身の理想の姿になるには、どの程度重要であるか」（理想自己）、「実際のあなた自身はどの程度そのような性質を備えているか」（現実自己）と質問し、それぞれ５件法で回答を求めた。

3．結果と考察

(A) 各尺度の分析

(1) 自己愛尺度の分析（Table1）

中村（2000）のNPIの因子分析による下位尺度化に従い、「注目・賞賛願望」得点、「統率、指導性」得点、「自立・主張性」得点、「優越・有能感」得点をそれぞれ求め、さらに4つの下位尺度すべての合計得点をNPIの総得点とした。NPIの総得点および各下位尺度についてクローンバックのα係数を求めたところ、すべてにおいて一応の信頼性を有することが確認された。下位尺度間の相関に関しては、「注目・賞賛願望」と他の下位尺度との間では、比較的相関が低かったが、「注目・賞賛願望」以外の下位尺度間で

は、中程度の相関が認められた。

国内においては、自己愛測定尺度としてNPIを用いることが多く（例えば、角田、1998；小塩、1997, 1998）、PAやPGDを使用した先行研究は少ないが、海外においては、PA、PGDを用いた研究は多い（例えばLapan & Patton,1986; Little, et al., 1992; Kerr et al., 1994）。そこで、本研究においては、NPIの下位尺度の傾向を検討するために、不適応な自己愛の特性のひとつである誇大的・顕示的自己を測定する尺度であるPAと、同じく不適応な自己愛の現われであるとされる理想化欲求を測定するPGDを使用した。PGDに関しては比較的高い信頼性が確認され、自尊感情との間に有意な負の相関が見られたため、不適応な自己愛を測定する尺度として適当であると考えられるのに対し、PAには十分な信頼性が認められず、自尊感情との相関も見られなかった。これは、もともと二者択一形式で作成されたPAを、中西・葛西（1992）に準じて5件法に変更して用いたこと、オリジナルが作成されたアメリカと日本の文化差などの要因が影響を与えているためと考えられる。例えば欧米文化では、他者とは異なったり、優れていることを強調することが認められている一方で、日本では集団の一員としての関係性が重視される（Markus & Kitayama, 1991）。そのような文化の違いが、当然誇大感の表現に影響を与えていると考えられる。実際Smith（1990）により、アジア系アメリカ人は白人アメリカ人に比較してNPIの得点が有意に低いことが示されている。そのため、自己愛を測定する上で文化的要因を考慮に入れることが必要であろう。信頼性の低さを考慮して、PAは以下の分析から除外した。今後、日本文化や日本人の特性なども考慮することにより、より妥当性や信頼性の高い尺度に改善していく必要があると考えられる。

NPIの各下位尺度とPGDの相関係数を検討したところ、「注目・賞賛願望」のみにPGDと正の有意な相関が認められた。PGDが不適応側面の指標となることから、「注目・賞賛願望」は他の下位尺度とは異質であり、不適応的自己愛、特に理想化における未熟性に関連していることが示唆されたといえよう。

また男女差をt検定により検討したところ、NPI総得点に関しては、男性の方が若干高得点を示していたが、有意差は見られなかった（t(155)=.44, n.s.）。各下位尺度別に男女差を検討したところ、同様に有意差は認められなかった。PGDの総得点に関しては女性の方が若干高かったが、有意差は見られなかった（t(168)=1.03, n.s.）。自己愛の男女差については、国内外において、様々な結果が見られる。国内で実施された最近の調査としては、角田(1998)が、男性のNPIの得点は女性よりも高く、性差が明瞭に表れているとしており、小塩(1998)が、NPI総得点と下位尺度である「優越感・有能感」において、男性の方が女性よりも有意に高得点であると報告している。しかし、今回の調査においては、NPI総得点は男性の方が高得点を示したものの有意差はなかった。また、NPIの下位尺度においても、PGDに関しても、有意差は見られなかった。これらの結果から本研究においては、尺度の得点上における自己愛の男女差はほとんどないと考えられる。

Table 1：NPI、自尊感情、PA、PGD の相関係数と信頼係数

	注目・賞賛願望	統率・指導性	自立・主張性	優越・有能感	NPI 総得点	自尊感情	α
注目・賞賛願望	—	.44***	.25**	.24**	.65***	-.06	.74
統率・指導性		—	.54***	.61***	.84***	.39***	.78
自立・主張性			—	.60***	.78***	.45***	.71
優越・有能感				—	.79***	.57***	.75
NPI 総得点					—	.43***	.88
PA	.34***	.35***	.55***	.29***	.50***	.13	.54
PGD	.43***	.09	-.16	-.11	.09	-.36***	.73
自尊感情						—	.74

*p<.05　**p<.01　***p<.001

(2) 自尊感情尺度の分析

自尊感情尺度は1因子構造であると考えられるので、全項目の合計点を自尊感情得点とし、クローンバ

ックのα係数を求めたところ、一応の信頼性が確認された（Table1）。またt検定を行ったところ、男女間で有意な差は認められなかった（t(168)= .45, n.s.）。

(3) M-H-Fスケールの分析

M-H-Fスケールのそれぞれの得点について、クローンバックのα係数を求めたところ、M得点は .85 ～ .90、H得点は .69 ～ .74、F得点は .70 ～ .82であり、一応の信頼性は確認されたと考えられる。

男女差についてt検定を行ったところ、社会的望ましさに関しては、予想通りM得点においては男性＞女性（t(161)=2.92, p< .01）、F得点においては女性＞男性（t(162)=3.21, p< .01）という結果が得られた。理想自己に関しては、M得点では有意差は見られず、H得点、F得点で女性＞男性（それぞれ、t(164)=2.02, p< .05、t(53.5)=2.64, p< .05）という結果が認められた。現実自己に関しては、M得点、H得点、F得点すべてに有意差は見られなかった。社会から要求されている性役割については、男性は男らしさを、女性は女らしさを重要視しているが、自らが理想としている自己像に関しては、女性は男性性と女性性双方を重要だと思っていることが示唆された。これは、伊藤・秋津(1983)の結果とも一致する。現実自己に関しては、男女差が見られなかった。現代の青年は「男らしさ」「女らしさ」とは何かを理解していても、それは自分自身の行動や考え方とは深く結びついていないようである（飯野、1997）。

(B) 自己愛と自尊感情の関連（Table1）

自尊感情が高い人ほどより適応的であるという結果が、多くの研究により示されている（Baumeister, 1993; Greenberg et al., 1992）ため、本研究では適応的側面を測定する指標として自尊感情尺度を用い、自己愛との関連を検討した。その結果、NPIの総得点は自尊感情と正の有意な相関が見られた。しかし下位尺度別に見ると、自尊感情と「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」には正の有意な相関が見られたが、「注目・賞賛願望」との間には有意な相関が認められなかった。NPIの下位尺度同士に相関があることを考慮して、「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」を統制し、「注目・賞賛願望」と自尊感情の偏相関係数を算出したところ、有意な負の相関が認められた（r= -.27, p<.01）。このことから、NPIの下位尺度のうち、「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」は適応的な面を反映することに対し、「注目・賞賛願望」は、不適応的な特徴を表すことが示唆された。また、PGDと自尊感情との間には、有意な負の相関が認められたため、PGDが不適応的な側面を表すことが確認された。NPIの下位尺度のうち「注目・賞賛願望」のみが、自尊感情との間に負の偏相関係数を示す一方、PGDとは正の相関を示すことから、他の下位尺度と異なり、不適応的な側面を表すことが示された。海外の研究においては、NPIの下位尺度の構造が日本の研究とは異なるが、「搾取・権利意識」（Exploitativeness／Entitlement）が他の因子と異なり、不適応的側面を表すという結果を得ていることが多い（Emmons, 1984; Watson et al, 1992; Watson & Morris, 1991）。今回の研究において使われた「注目・賞賛願望」は、この「搾取・権利意識」と共通の項目を多く含んでいるため、海外における先行研究を裏付ける結果となった。

(C) 自己愛と性役割の関連

(1) 自己愛と男性性、女性性、Humanity の関連 (Table2)

NPIの総得点および下位尺度とM,H,F各得点との間の相関を求めた。社会的に望ましい性役割に関しては、「自立・主張性」のみがM得点とH得点との間に、弱い正の相関が見られた。理想自己の性役割に関しては、「注目・賞賛願望」はM得点とF得点との間に、「自立・主張性」はM得点とH得点との間に、「統率・指導性」と「優越・有能感」はF得点との間に、正の有意な相関が見られたが、いずれも弱い相関であった。現実自己の性役割に関しては、「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」はM得点H得点との間に、中程度から比較的強い正の有意な相関が認められた。F得点は「統率・指導性」と「優越・有能感」との間には、中程度の相関が見られたが、「自立・主張性」とF得点との間には弱い相関しか見られなかった。また、「注目・賞賛願望」に関しては、F得点との間に弱い相関が認められたのみであった。自己愛の下位尺度のうち、「注目・賞賛欲求」が性役割との関連が強いという報告もあるが（小塩、1998）、本研究においては、「注目・賞賛願望」は他の下位尺度とは異なり、性役割とはほとんど関連がないこと

が示唆された。また、先行研究においては、自己愛と男性性の関連が報告されていることが多いが、本研究においては、男性性、女性性、humanity 全てと適応的な自己愛の関連が見られた。ただし、女性性との相関係数は総じて低く、特に「自立・主張性」との相関が弱かった。この結果は、女性性は主張性の発達を妨げるとしている先行研究の結果（Sawrie et al, 1991）とも一致する。

また、社会的な望ましさや理想自己における性役割と自己愛の相関は弱かった。どのような性役割を持つことが望ましいか、つまり、性役割観と自己愛には強い関連はないが、現実に自分が身につけていると思われる性役割は、自己愛とより強い関連があることが示唆された。

男女別に、NPIとM,H,F各得点の相関を検討したところ、男性に関しては、「統率・指導性」と社会的な望ましさのM得点、H得点との間は、負の相関が見られたが(r= -.41, p<.01;r= -.31, p<.10)、女性に関しては、弱い正の相関しか見られなかった(r= .11, n.s.; r= .18, p<.05)。社会的に望ましい性役割としての男性性を重要視する男性ほど、「統率・指導性」に関する自己愛が低いという結果が見られた。ただし、理想自己における性役割では、このような傾向は見られなかった。以上のように、NPIの得点に関しては男女差は見られなかったが、性役割との関連について男女で異なる傾向が認められたということは、自己愛の性質において男女差があることが示唆されたと考えられる。

PGDとM,H,F各得点との間の相関に関しては、理想自己のF得点とは正の有意な相関が認められ、現実自己のM得点とH得点とは負の相関が見られたが、いずれも弱い相関であった。NPIの下位尺度は、現実自己における性役割との間に正の相関が見られたため、PGDはNPIとは異なる傾向を有していることが示唆された。PGDに関しても、男女別にNPIとの相関を検討したが、顕著な差は見られなかった。

Table 2：自己愛尺度と社会的望ましさ、理想自己、現実自己における性役割の相関係数

	社会的望ましさ			理想自己			現実自己		
	M	H	F	M	H	F	M	H	F
NPI総得点	.01	.11	.14	.20*	.13	.22**	.59***	.41***	.38***
注目・賞賛願望	.11	.04	.11	.21*	.05	.16*	.16	-.02	.18*
統率・指導性	-.01	.05	.14	.05	.10	.19*	.49***	.33***	.35***
自立・主張性	.22**	.21**	.09	.30***	.17*	.08	.62***	.41***	.19*
優越・有能感	.03	.09	.06	.07	.13	.21**	.62***	.64***	.49***
PGD	.05	.04	.11	.15	.14	.21**	-.18*	-.17*	.01

*p<.05　**p<.01　***p<.001

(2) 自己愛と性役割タイプの関連

M-H-Fスケールの現実自己におけるM得点の中央値が30、F得点の中央値が28であったので、M得点が30点以上でF得点が28点以上の被験者を「アンドロジニー群」、M得点が30点以上でF得点が28点未満を「男性性群」、M得点が30点未満でF得点が28点以上を「女性性群」、M得点が30点未満でF得点が28点未満を「未分化群」に分類した。それぞれの内訳をTable3に示す。先行研究においては、男性に最も多いのは男性性群であり、女性に最も多いのは女性性群であったが（Carroll, 1989)、本研究においては、男女ともに最も多かったのはアンドロジニー群、次いで未分化群であった。高校生を対象にした飯野（1997）の研究においても、自分を「男らしいと思わない男子」や「女らしいと思わない女子」が多いことが報告されており、現代青年の男女の意識の差異は少なくなってきていると考えられる。また、男性では女性性群の割合が男性性群よりも高く、女性では男性性群の方が女性性群よりも高かった。つまり、自分を女性的と認知している男性は、男性的と認知している男性より多く、男性的と自己認知している女性は、女性的と認知している女性より多いことが示唆された。女性は、女性性よりもむしろ男性性を高く評価していることが報告されているが（伊藤、1978；伊藤・秋津、1983)、本研究においては、男性にとっても、男性性のみが重要なわけではなく、女性性を身につけていると認知する男性が多いことが示唆された。ただ、社会

的望ましさにおいては、男性は男性性を重要視し、女性は女性性を重要視するという結果が得られていることから、自己認知の際に、「望ましい像」と自己像を比較しているとすれば、男性は自分の男性性を低く認知し、女性は自分の女性性を低く認知していることが考えられる。そのため、単純な男女比較は難しく、多様な側面を検討する必要があろう。

性役割タイプと性を独立変数とし、自己愛尺度の得点を従属変数として、分散分析を行なった。その結果、「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」においては、交互作用は有意ではなく、性役割タイプの主効果は有意であった。しかし、「注目・賞賛願望」およびPGDにおいては、交互作用も主効果もいずれも有意ではなかった。主効果が有意であった場合には、下位検定としてLSD法による多重比較を行った。男女込みの性役割タイプ別平均点と分散分析の結果をTable4に示す。先行研究においては、最も高い自己愛傾向を示していたのは、男性で男性性役割を持つ群であったが (Watson et al, 1987; Carroll, 1989)、本研究では、NPIの「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」においては、アンドロジニー群が最も高い得点を、未分化群が最低点を示し、男性性、女性性双方を備えている人は自己愛が高いという結果が認められた。しかし、「注目・賞賛願望」に関しては、平均得点に有意差は見られず、他の下位尺度とは異なる傾向が見られた。Bem (1974)は、アンドロジニー群が心理的に最も適応的であるとしているが、本研究の結果においても、アンドロジニー群が最も高い適応的な自己愛を持っていることが示唆された。

Table 3：性役割タイプの男女別人数

	アンドロジニー	男性性群	女性性群	未分化群
男性 (n=40)	17 (42.5%)	4 (10.0%)	8 (20.0%)	11 (27.5%)
女性 (n=115)	38 (33.3%)	27 (23.5%)	19 (16.5%)	31 (27.0%)

Table 4：性役割タイプ別NPI得点

	アンドロジニー	男性性	女性性	未分化	F値	
NPI総得点	134.43	126.93	119.81	106.53	18.96***	アンドロ>男・女>未分化
(SD)	(15.14)	(13.50)	(14.30)	(17.69)		
注目・賞賛願望	36.28	34.80	34.26	31.41	2.29	
(SD)	(5.75)	(6.18)	(7.48)	(6.67)		
統率・指導性	24.58	22.90	21.19	17.14	14.08***	アンドロ・男・女>未分化
(SD)	(4.34)	(5.45)	(4.62)	(4.79)		アンドロ>女
自立・主張性	39.60	38.52	34.07	32.60	9.46***	アンドロ・男>未分化
(SD)	(5.62)	(5.12)	(4.85)	(6.91)		アンドロ・男>女
優越・有能感	34.45	30.77	31.50	25.00	22.21***	アンドロ>男・女>未分化
(SD)	(4.64)	(5.18)	(4.61)	(5.34)		
PGD	27.72	28.16	28.96	28.88	.25	
(SD)	(5.78)	(5.42)	(5.13)	(4.53)		

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

(D) 社会的に望ましい性役割・理想自己における性役割と現実自己における性役割の差異と、自己愛との関連 (Table5)

社会的望ましさにおける性役割の重要度から、現実自己における性役割の実現度を引き、正の値のみを合計した値を「社会的望ましさと現実自己の差異」、理想自己における性役割の重要度から、現実自己における性役割の実現度を引き、正の値のみを合計した値を「理想自己と現実自己の差異」とした。ここで

は、社会的望ましさや理想自己における重要度が現実自己の実現度より大きい場合のみを検討するために、正の値のみを合計し差異得点とした。「社会的望ましさと現実自己の差異」とNPIの相関を求めたところ、「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」は、M得点、H得点に関する差異との間に有意な負の相関が認められた。F得点の差異は「統率・指導性」「優越・有能感」との間には相関が見られたが、「自立・主張性」との間には相関は見られなかった。また、「注目・賞賛願望」に関しては、どの得点の差異とも相関は見られなかった。「理想自己と現実自己の差異」とNPIの相関も、若干数値が高くなる傾向はあったが、ほぼ同様の結果が認められた。社会的に望ましい像と個人の理想像は異なるものであるが、本研究においては大きな差異はなかった。理想自己と現実自己の差異が、自尊感情と負の相関を示すことは、先行研究においても報告されており（遠藤、1992；水間、1998）、現実自己が理想自己に近づくほど、より適応的な状態であると考えられる。したがって、「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」は自己愛の適応的な側面を表すことが示唆されたといえよう。

「男性性やhumanityのおいての差異」と比較して、「女性性についての差異」に関しては、総じて相関係数は低く、特に「自立・主張性」と「女性性の差異」の間には相関は見られなかった。つまり、重要だとみなしている女性役割を実現できていなくても、適応的な自己愛には大きな影響を与えていないことが示唆された。女性役割は他の性役割よりも低く評価されていることが報告されているが（伊藤、1978）、本研究の結果においても、女性役割はあまり高く評価されていないということが示唆された。

男女別に、それぞれの差異と自己愛との相関を検討したところ、男性に関しては、M得点の「社会的望ましさと現実自己の差異」と「統率・指導性」「優越・有能感」との間には、強い負の相関が見られたが($r= -.73$, $r= -.74$, ともに$p<.001$)、女性に関しては、中程度の負の相関しか認められなかった($r= -.32$, $p<.01$, $r= -.42$, $p<.001$)。つまり、男性にとっては、男性性における「社会的望ましさと現実自己との差異」が大きくなるほど、「統率・指導性」「優越・有能感」に関する自己愛が低くなるという傾向が見られた。社会的に望ましい男性性を重要視する男性ほど、「統率・指導性」に関する自己愛が低いという結果と合わせて考察すると、社会的に望ましい男らしさを重要だと考える男性は、それを体得できない自らを顧みて、自己愛が低下するのではないかと考えられる。

「社会的に望ましい性役割と現実自己における性役割の差」と「理想自己と現実自己における性役割の差」、それぞれの差異について、男女差の検定を行ったところ、どちらもF得点のみが有意に女性の方が高かった($t(158)=2.31$, $p<.05$; $t(158)=3.58$, $p<.01$)。役割期待と自己像のズレは、男性が年齢上昇とともに徐々に解消していくのに対して、女性では逆に高校から大学にかけて大きくなる傾向があり、女性性に関しては、成人に至るまで一貫して、男性より女性のズレの方が大きいことが報告されている（伊藤・秋津、1983）。本研究の被験者である大学生や専門学校生においても、女性の方が男性よりもより強く性役割葛藤を感じていることが示唆された。

PGDと「社会的望ましさと現実自己の差異」の相関を求めたところ、有意な相関は認められなかったが、「理想自己と現実自己の差異」に関しては、M得点、H得点、F得点すべての差異との間に弱い正の有意な相関が認められた。以上の結果からも、PGDが不適応の指標となることが確認されたといえよう。また、社会的望ましさと現実自己のズレより、理想自己と現実自己のズレの方が、より未熟な自己愛に影響を与えることが示唆された。

Table 5：「社会的望ましさと現実自己の差異」「理想自己と現実自己の差異」と自己愛尺度の相関係数

	社会的望ましさ－現実自己			理想自己－現実自己		
	M	H	F	M	H	F
NPI総得点	-.42***	-.33***	-.20*	-.41***	-.36***	-.22**
注目・賞賛願望	-.04	.03	-.05	.03	.05	-.02
統率・指導性	-.43***	-.28***	-.20*	-.43***	-.30***	-.21**
自立・主張性	-.32***	-.23**	-.08	-.36***	-.30***	-.16*
優越・有能感	-.51***	-.55***	-.34***	-.55***	-.60***	-.31***
PGD	.15	.13	.06	.28***	.25**	.18*

*p<.05　**p<.01　***p<.001

4. 総合的考察

本研究の目的は、自己愛の適応・不適応的側面および性役割との関連を検討することにあった。検討の結果、自尊感情との関連、および理想自己と現実自己の差との関連から、「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」が適応的側面を表し、「注目・賞賛願望」が不適応的側面を表すことが示された。また、PGDにおいても不適応的自己愛を測定する尺度であることが確認された。しかし、NPIはもともと人格障害の診断基準から作られた尺度であり、「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」が極端に高い場合、適応的であるとは考えにくい。自己愛傾向のこれらの下位尺度と適応の側面が、直線的な関係ではなく、これらの下位尺度が低いのみでなく、高すぎる状態でも不適応につながることも考えられる。今回は一般の学生を対象としているが、自己愛人格障害のように自己愛が極度に強い場合、適応的な自己愛と思われるNPIの下位尺度においても、一般の学生より極端に高得点になる可能性がある。今後そのような検討を加えていく必要があろう。また、「注目・賞賛願望」は自尊感情と負の偏相関係数が見られたことや、PGDと正の相関が見られたことから、理想化の未熟性と関連することが示された。すなわち、自分の中に明確な理想を形成できなかったために、他人からの注目や賞賛を受けられないと、自尊感情が維持できないと考えられる。そのような「注目・賞賛願望」が強い状態、つまり、自分で自分をどのように評価しているかに関わりなく、他人から注目されたい、賞賛されたい、高い評価を得たいと渇望しているような状態は不適応であることが示唆された。中村（2000）の研究においても、社会的スキルと「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」との間に正の相関が、「注目・賞賛願望」との間には負の相関が認められたが、本研究の結果はそれを裏付けるものとなった。

自己愛的な患者をGabbard（1997）は周囲を気にかけないoblivious型と、過剰に気にかけるhypervigilant型の2タイプにわけている。周囲を気にかけないタイプは、他の人々の反応に鈍感な傲慢なタイプで、DSM-Ⅳ（APA, 1994）の診断基準で記述されている臨床像とよく一致することから、NPIの総得点が高いことは、このタイプの特性を強く持つと考えられる。一方、過剰に気にかけるタイプは、他の人々の反応に過敏で抑制的で内気というタイプであり、同じ自己愛的でありながらも周囲を気にかけないタイプとは全く正反対の表現型を持つ。しかしどちらのタイプも自己評価の維持に過剰にこだわっているという共通の病理を持つ。そのため、人に良く思われたいという傾向を示す「注目・賞賛願望」はどちらのタイプでも得点が高いことが予測され、自己愛の病理の重さが「注目・賞賛願望」の強さと関連があると予想される。一方、適応的な自己愛を示す他の下位尺度は表現型の違いによって、得点のパターンが変わると考えられる。例えば、周囲を気にかけないタイプでは「優越・有能感」が高く、過剰に気にかけるタイプでは「自立・主張性」が低いことが予測される。今後このような自己愛の表現型における二面性と、NPIの下位尺度パターンとを検討することが必要であろう。

本研究において、自己愛の男女差は見られなかったが、それは現実自己における性役割の男女差が認められなかったことと関連があると考えられる。自己愛について、性に関する有意差はなかったが、適応的な自己愛に関しては、性役割タイプに有意差が見られ、男性性、女性性双方が高いアンドロジニー群が最も高い自己愛を示し、男性性、女性性双方が低い未分化群が最も低い自己愛を示していた。また、現実自己におけるすべての性役割と適応的な自己愛との間に相関が認められた。先行研究においては、自己愛と男性性との関連が報告されていることが多く、性役割タイプとの関連についても、男性で男性性群が最も高い自己愛を示していた。しかし、本研究の結果においては、男性にとっても、男性性、女性性の両方を併せもつことが、適応的な自己愛を高めることが示唆された。むしろ、社会的に望ましい男性性を重要視する男性は、それを実現できない自己を顧みて、適応的な自己愛が低いという結果も見られ、男性にとっての性役割が変化してきているのではないかと考えられる。女性性の項目である「かわいい」や「おしゃれな」「色気のある」などは、男性にとっては、価値のない性質であると見られていたが、現代の日本においては、それらの性質が若い男性にとって、マイナスの要素ではなく魅力のひとつであると考えられる傾向がある。また女性は、男性よりも強く性役割葛藤を感じていることが示唆されたが、自己愛についての男女差は認められなかった。つまり、女性の性役割葛藤は自己愛に影響を与えているわけではなく、社会的に望ましい像と自己像は「別のもの」と考えていることが推測される。そのような性役割の変化が、

自己愛にも影響を与えていると考えられる。

「社会的な望ましさと現実自己の差異」とPGDに関連はなかったが、「理想自己と現実自己の差異」はPGDとの関連が認められた。PGDは未熟な自己愛である「理想化欲求」を測定するものとして作成されているので、「理想自己と現実自己の差異」の大きさが、未熟な自己愛と関連していると考えられる。つまり、高すぎる実現不可能な理想を設定することが、「理想化欲求」に関連することが示唆された。また、PGDは理想自己における女性性との相関も見られるため、理想的な自己像において女性性を重視することと、未熟な自己愛が関連していることも考えられる。先行研究（Sawrie et al, 1991）においても、「理想化欲求」は女性性と関連することが報告されている。PGDを使用した先行研究は、我が国ではまだ少なく、今後より詳細に検討することが必要であろう。

以上の結果から、自己愛を測定する上で、適応的な側面においては「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」、不適応的な側面においては「注目・賞賛願望」およびPGDが適当であることが示唆された。自己愛の不適応的側面は問題行動や人格障害などと深い関連があると思われるが、測定尺度としては、４下位尺度のうちの１つしかない。また、PAは十分な信頼性が得られず、有用性には問題があった。このため、今後自己愛の不適応的側面を測定する方法をさらに検討していく必要があろう。また自己愛の表現型の二面性を考慮しながら、自己愛の適応・不適応的側面の検討をしていく必要があると考えられる。

＜引用文献＞

Akhtar, S., & Thomson, J.A. 1982 Overview: Narcissistic personality disorder. American Journal of Psychiatry, 139, 12-20.

American Psychiatric Association 1994 Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Fourth Edition (DSM-Ⅳ). Washington, DC.

Baumeister, R.F. 1993 Understanding the inner nature of low self-esteem: Uncertain, fragile, protective, and conflicted. In R.F.Baumeister (Ed.), Self-esteem: The puzzle of low self-regard, 201-218. New York: Plenum

Bem, S.L., 1974 The measurement of psychological androgyny. Journal of Counseling and Clinical Psychology, 42, 2, 155-162.

Carroll. L., 1989 A comparative study of narcissism, gender, and sex-role orientation among bodybuilders, athletes, and psychology students. Psychological Reports, 64, 999-1006.

Emmons, R.A. 1984 Factor analysis and construct validity of the narcissistic personality inventory. Journal of Personality Assessment, 48, 291-300.

Emmons, R.A. 1987 Narcissism: Theory and measurement. Journal of Personality and Social Psychology, 52, 11-17.

遠藤由美 1992 自己評価基準としての負の理想自己 心理学研究 64、3 214—217

遠藤久美・橋本宰 1998 性役割同一性が青年期の自己実現に及ぼす影響について 教育心理学研究 46、1、86—94.

Exner, J.E. 1969 Rorschach responses as an index of narcissism. Journal of Personality Assessment, 33, 324-330.

Freud, S. 1914 On narcissism : an introduction. 懸田克躬 訳 1953 ナルチシズム入門 フロイド選集 5 性欲論 日本教文社

Gabbard, G.O. 1994　精神力動的精神医学3　臨床編：2軸障害　岩崎学術出版

Greenberg, J., Solomon, S., Pyszczynski, T., Rosenblatt, A., Burling, J., Lyon, D., Simon, L., & Pinel, E. 1992 Why do people need self-esteem? Converging evidence that self-esteem serves an anxiety buffering function. Journal of Personality and Social Psychology, 63, 913-922.

Haaken, J. 1983 Sex differences and narcissistic disorders. American Journal of Psychoanalysis, 43, 315-324.

Harder, D.W. 1979 The assessment of ambitious-narcissistic character style with three projective tests: The early memories, TAT, and Rorschach. Journal of Personality Assessment, 43, 23-32.

細井啓子 1977 青年期におけるナルシシズム的傾向 日本教育心理学会第19回総会発表論文集、470—471.

飯野晴美 1997 「男らしさ」「女らしさ」の自己認知と性役割観 明治学院論集 600、教育学特集19、49—61.

伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究、26、1—11.

伊藤裕子・秋津慶子 1983 青年期における性役割観および性役割期待の認知 教育心理学研究、31、2、146—151.

角田豊 1998 共感性と自己愛傾向の関連 心理臨床研究、 16、2、129—137

柏木恵子 1972 青年期における性役割の認知「 教育心理学研究、20、1、48—58

Kernis, M.H., & Sun, C. 1994 Narcissism and reactions to interpersonal feedback. Journal of Research in Personality, 28, 4-13.

Kerr, A.E., Patton, M.J., Lapan, R.T., & Hills, H.I. 1994 Interpersonal Correlates of Narcissism in Adolescents. Journal of Counseling and Development, 73, 204-210.

Kohut, H. 1971 水野・笠原監訳 1994 自己の分析　みすず書房

Lapan, R., & Patton, M. 1986 Self-psychology and the adolescent process: Measurement of pseudoautonomy and peer-group dependence. Journal of Counseling psychology, 33, 136-142.

Little, T., Watson,P.J., Biderman M.D., & Ozbek, I.N. 1992 Narcissism and object relations. Psychological Reports, 71, 799-808.

Markus, H.R. & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. Psychological Review, 98,224-253.

水間玲子 1998 理想自己と自己評価及び自己形成意識の関連について 教育心理学研究 46、131―141

中村晃　2000　自己愛と社会的スキル、および孤独感との関連　日本教育心理学会42回発表論文集、558.

中西信男・葛西真紀子　1992　現代青年の対人関係にみるナルシズム　青少年問題研究、41、1-18.

大石史博・福田美由紀・篠置昭男　1987　自己愛的人格の基礎的研究（1）-自己愛的人格目録の信頼性と妥当性について-　日本教育心理学会29回発表論文集、534-535.

小塩真治　1997　自己愛傾向に関する基礎的研究－自尊感情、社会的望ましさとの関連　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）、44、155-163.

小塩真司 1998 自己愛傾向に関する一研究－性役割との関連－名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）、45、45―53.

Philipson, I. 1985 Gender and narcissism. Psychology of Women Quarterly, 9, 213-228.

Raskin, R., & Hall, C.S. 1979 A narcissistic personality inventory. Psychological Reports, 45, 590.

Raskin, R., & Hall, C.S. 1981 The narcissistic personality inventory: alternate form reliability and further evidence of construct validity. Journal of Personality Assessment, 45, 159-162.

Raskin, R., & Terry, H. 1988 A principal-components analysis of the Narcissistic Personality Inventory and further evidence of its construct validity. Journal of Personality and Social Psychology, 54, 890-902.

Robbins, S.B. 1989 Validity of the superiority and goal instability scales as measures of defects in the self. Journal of Personality Assessment, 53, 122-132.

Sawrie, S.M., Watson, P.J., & Biderman, M.D. 1991 Aggression, sex role measures, and Kohut's psychology of the self. Sex Roles, 25, 314, 141-161.

Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image. Princeton : Princeton University Press.

Smith, B.M. 1990 The measurement of narcissism in Asian, Caucasian, and Hispanic American women. Psychological Reports, 67, 779-785.

Urist, J. 1977 The Rorschach test and the assessment of object relations. Journal of Personality Assessment, 41, 3-9.

Watson, P.J., Taylor, D., & Morris., R.J. 1987 Narcissism, sex roles, and self-functioning. Sex Roles, 16, 7/8 335-350.

Watson, P.J., Biderman, M.D., & Boyd, C. 1989 Androgyny as synthetic narcissism : sex role measures and Kohut's psychology of the self. Sex Roles, 21, 3/4, 175-207.

Watson, P.J., & Morris, R.J. 1991 Narcissism, empathy and social desirability. Personality and Individual Differences, 12, 575-579.

Watson, P.J., Little, T., Sawrie, S.M., & Biderman, M.O. 1992 Measures of the narcissistic personality: Complex of relationships with self-esteem and empathy. Journal of Personality Disorders, 6, 434-449.

Watson, P.J., Biderman, M.D., & Sawrie, S.M. 1994 Empathy, Sex Roles Orientation, and Narcissism. Sex Roles, 30, 9/10, 701-722

Westin, D. 1985 Self and society. Cambridge : Cambridge University Press

山本真理子・松井豊・山成由起子　1982　認知された自己の諸測面の講造　教育心理学研究 30、64-68.

The relationships between the adaptive and maladaptive aspects of narcissism, and sex roles

NAKAMURA, Akira MATSUNAMI, Tomoko

The relationships between the adaptive and maladaptive aspects of narcissism, and various aspects of sex roles were examined in a group of adolescents. The Narcissistic Personality Inventory (NPI), the Pseudoautonomy scale (PA), the Peer-Group Dependence scale (PGD), the self-esteem scale and the M-H-F scale for assessing sex roles were used in this study. The analysis of self-esteem and NPI suggested that among the sub-scales of NPI, "Leadership (LS)", "Independence / Assertion (IA)" and "sense of Superiority and Competence (SC)" expressed the adaptive aspect, while "desire for Attention and Admiration (AA)" reflected the maladaptive phase. LS, IA, and SC showed positive correlation with masculinity, humanity and femininity of the real self though AA expressed no correlation with masculinity and humanity. On the aspects of masculinity and humanity, the discrepancy between the socially desirable sex roles and the sex roles of the real self and the discrepancy between the sex roles of the idealized self and sex roles of the real self correlated positively with LS, IA, and SC, but did not with AA. In addition, androgyny which has higher masculinity and femininity shows higher adaptive narcissism.